

ChMd80 アポロ 12 号が観測した謎の光球の光核
The Light Core of Mysterious Light Sphere observed by Apollo 12
黒月樹人 (KULOTSUKI Kinohito)

はじめに

「ChMd79 アポロ 12 号がひんぱんに観測した謎の光球の正体は？」において、これが、太陽でもなく、人工的な照明器具でもないということが分かってきました。

また、このときの解析で、光球の光るところの配色パターンを、①暗ゴブリンアイで暗い方へと調整し、②色加味解析へと進むことにより、光核のくわしい構造を見やすくすることができました。

このような光核のパターンが、他の画像としてとらえられている光球で、どのようなになっているのかを、さらに詳しく調べてゆきます。

画像記号の AS12-46-#### はマガジン Y のもので、次の URL にあります。

<http://www.lpi.usra.edu/resources/apollo/catalog/70mm/magazine/?46>

また、AS12-47-#### はマガジン V のもので、次の URL にあります。

<http://www.lpi.usra.edu/resources/apollo/catalog/70mm/magazine/?47>

AS12-46-6739



図 1 AS12-46-6739

この AS12-46-6739 のページの一番下に大きなサイズの画像につながる行があります。この巨大サイズの画像を開いて、そこから、光球の中心部分を含む領域を切り取りました。

そして、このJPEG画像をペイントソフトでビットマップ画像に変換したのち、ゴブリンクォークに取り込み、暗ゴブリンアイ処理で、全体の配色を中間的な位置へと変換しました。

さらに、色加味解析ページで、適度に対象濃淡値の範囲を狭めてから、配色 B で色を変換しました。配色 B の上側のほうが暗く、下側のほうが明るいものとなっています。(暗い) 青→水色→緑→黄→赤→桃色 (明るい) という対応です。



図 2 AS12-46-6739 の光球

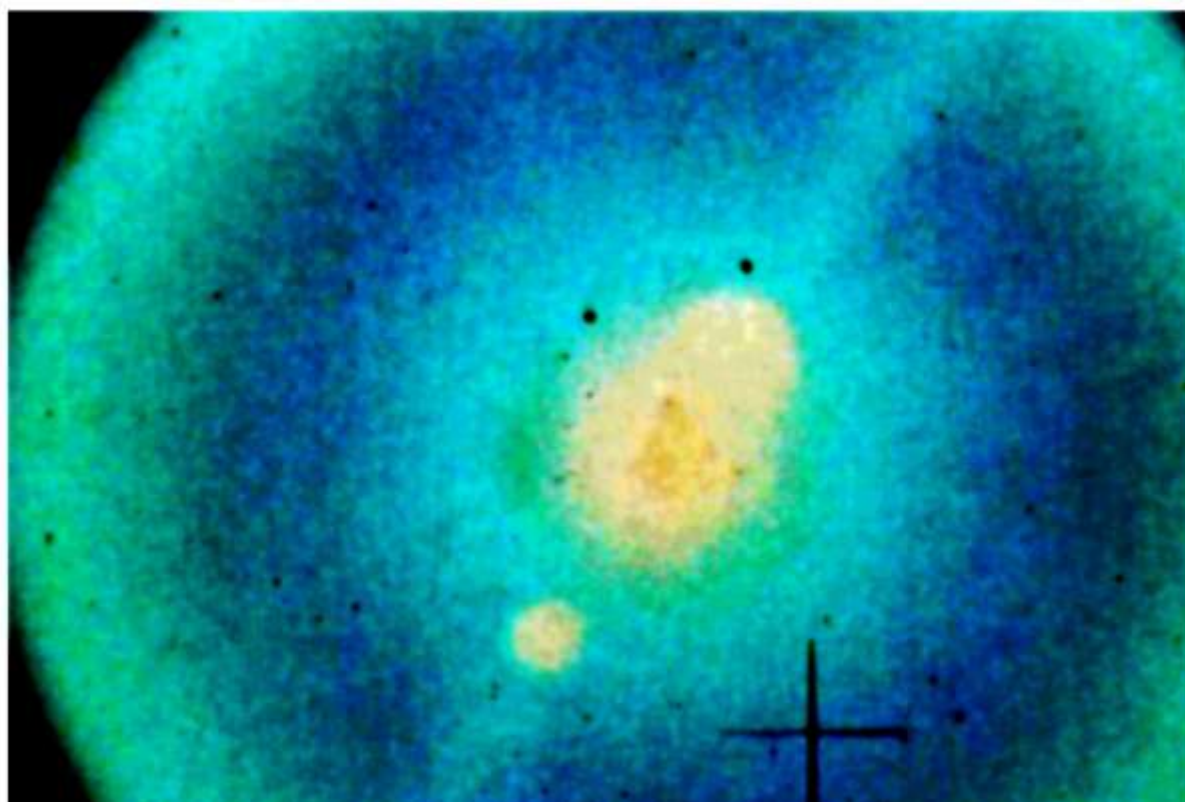


図 3 AS12-46-6739 の光球→ゴブリンアイ処理

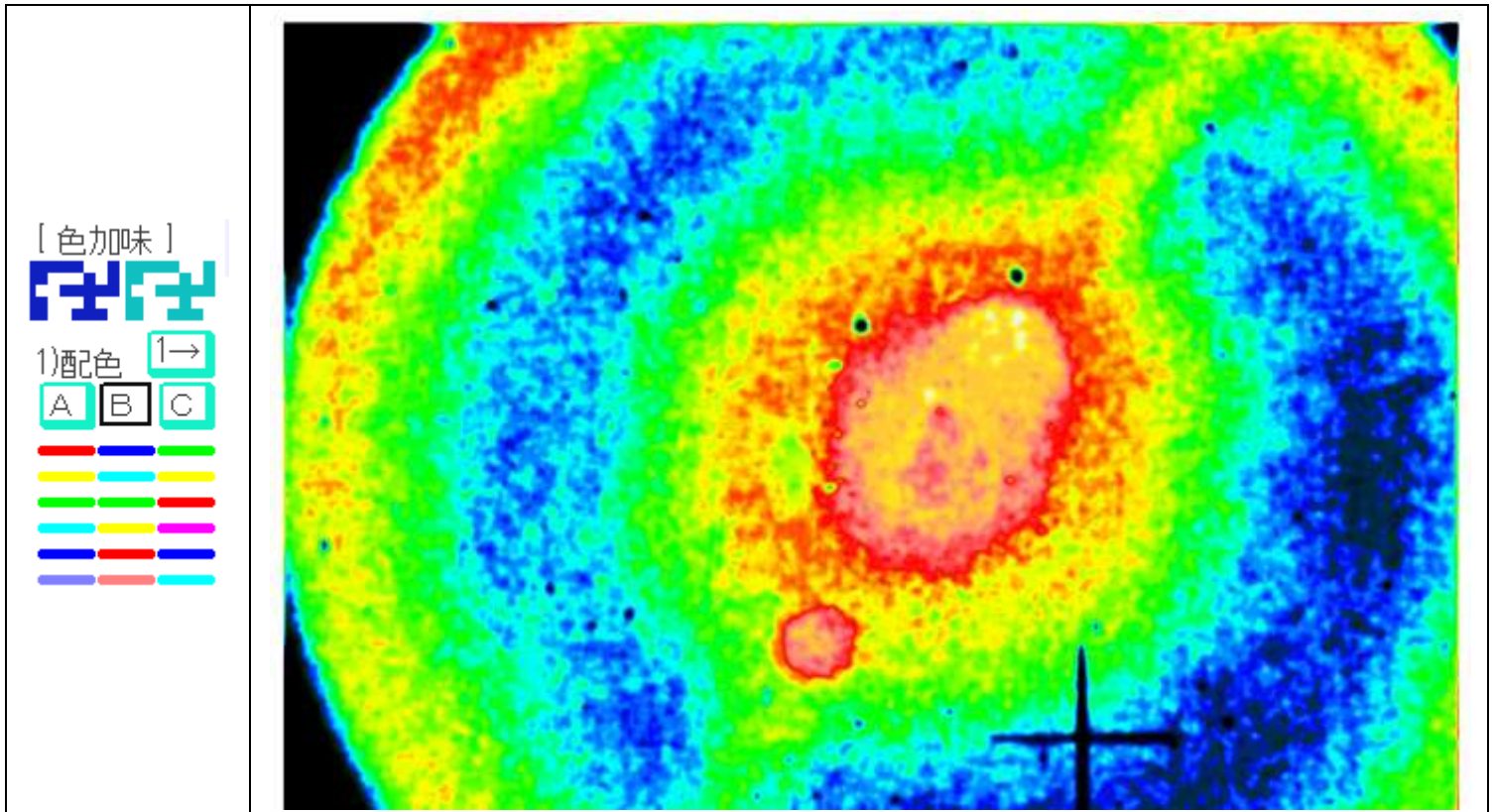


図4 AS12-46-6739 の光球→ゴブリンアイ処理→色加味解析

この光球の内部構造はニワトリの卵によく似ています。ただし、殻が透明になっていると見なすと、白熱電球にも似ています。内部が透明な白身部分と半透明な黄身部分のように、青い領域と赤い領域とに分離しているようですし、黄身がむやみに回転しないように黄身を支えているカラザのような、黄身を殻に結びつけている帯のような、中央を貫く構造が見えています。

卵の黄身に相当する赤い部分が大小二つのもので構成されています。原生動物のゾウリムシにあったような、大核と小核を思い起こしてしまいます。

AS12-46-6765



図5 AS-46-6765



図6 AS-46-6765 の光球

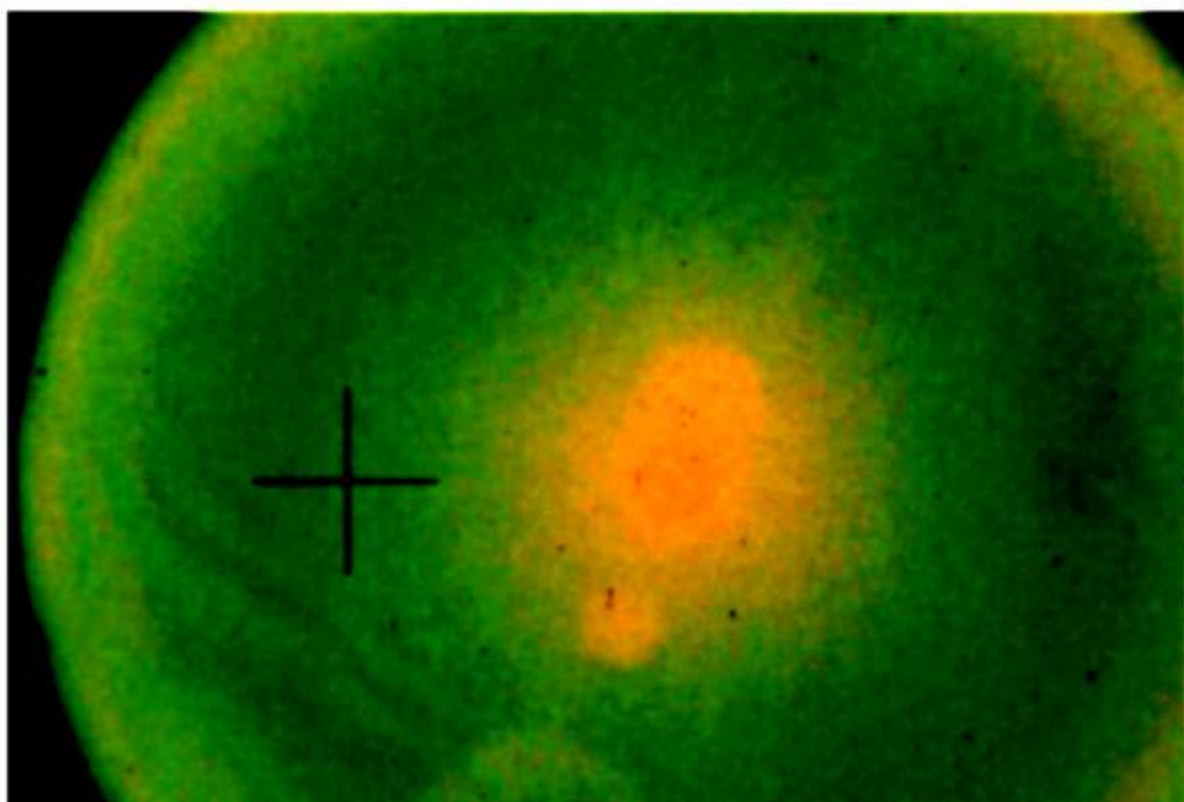


図7 AS-46-6765 の光球→ゴブリンアイ処理

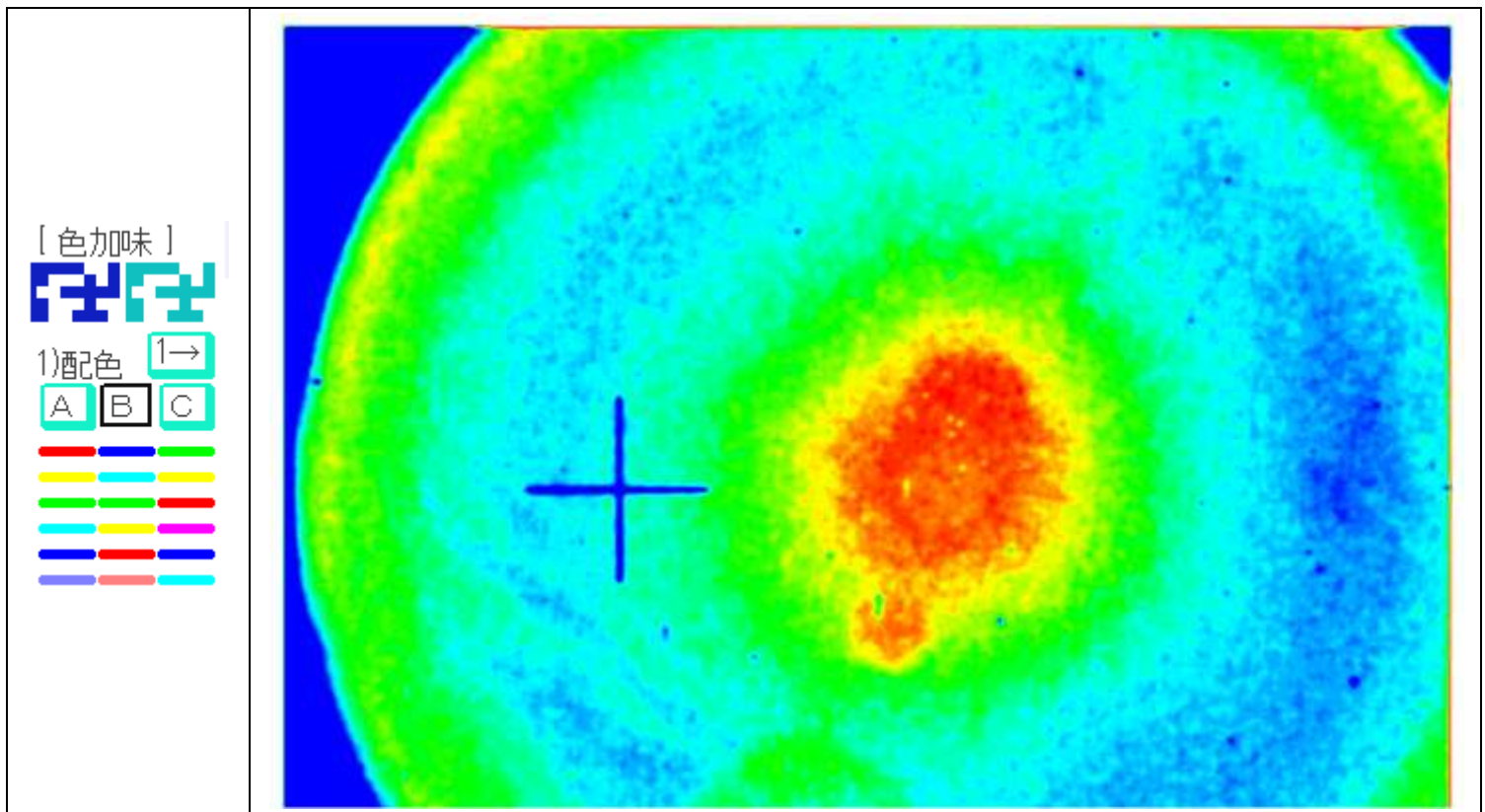


図8 AS-46-6765 の光球→ゴブリンアイ処理→色加味解析

これは ChMd79 で最初に解析したものです。中心にある赤く色づけられた、光る源の形状が、まったく工学的なものではなく、どちらかという、生物学的なものに見えたので驚きました。太陽のフレアや、黒点からわき上がる磁場のパターンにも似ています。これが人工的な照明器具だとしても、地球の工学技術者が、このような「フィラメント」をつくるのでしょうか。

AS12-46-6767



図9 AS12-46-6767



図 10 AS12-46-6767 の光球

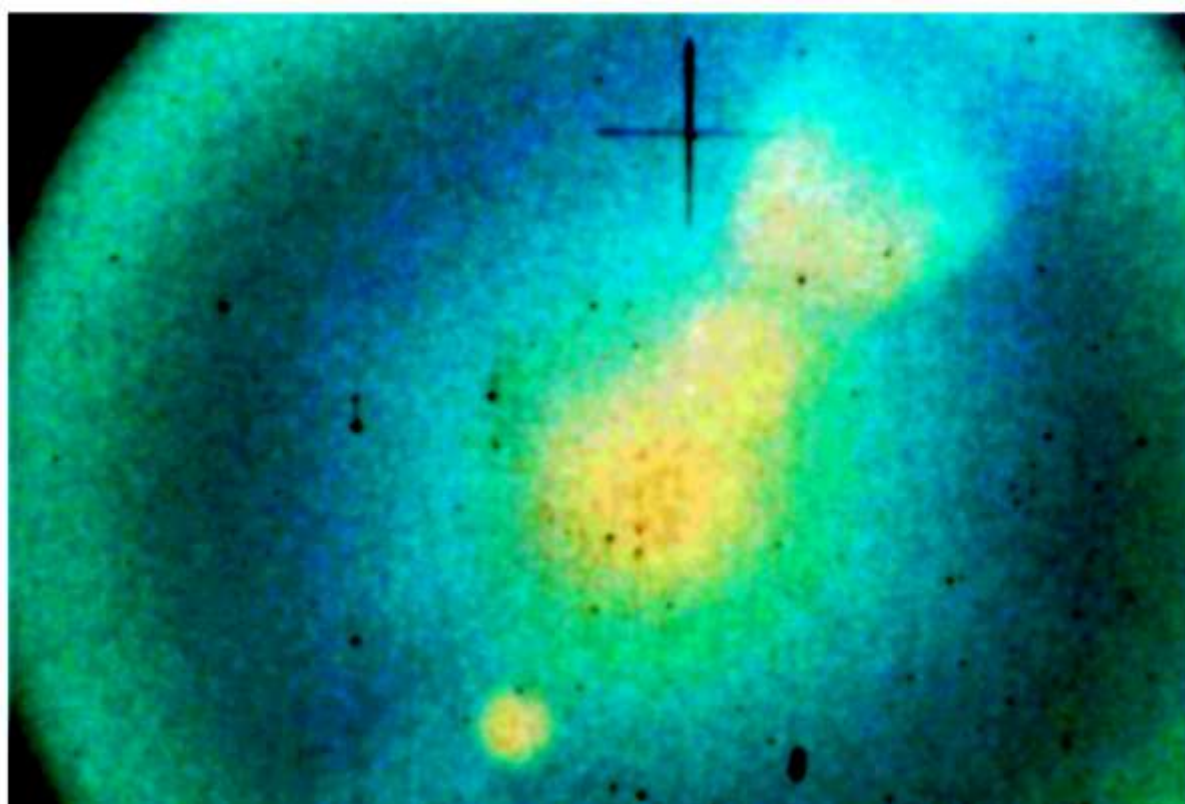


図 11 AS12-46-6767 の光球→ゴブリンアイ処理

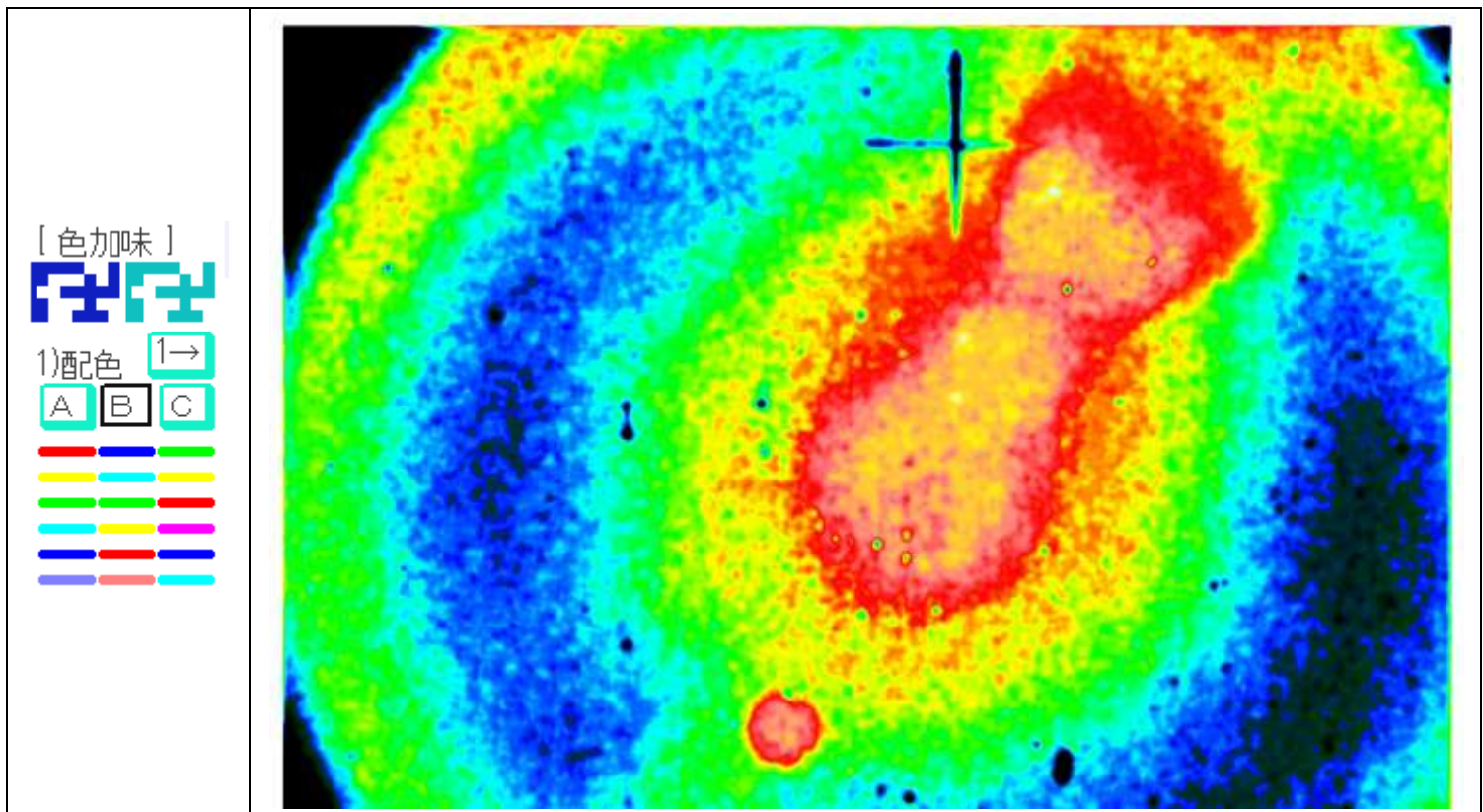


図 12 AS12-46-6767 の光球→ゴブリンアイ処理→色加味解析

黄身に相当する、赤い領域の、大核にあたるほうが、まるで2つに分裂しているようなパターンとなっています。金魚のような形にも見えます。

AS12-46-6805



図 13 AS12-46-6805



図 14 AS12-46-6805 の光球

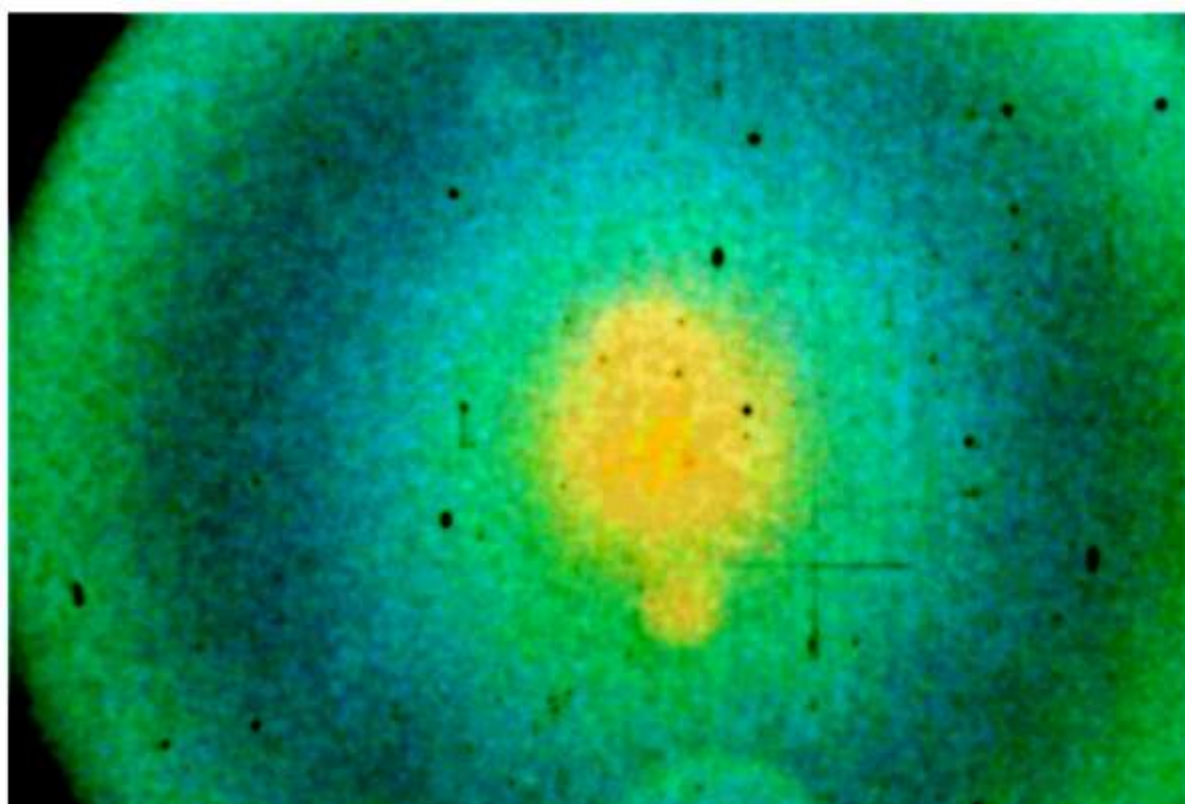


図 15 AS12-46-6805 の光球→ゴブリンアイ処理

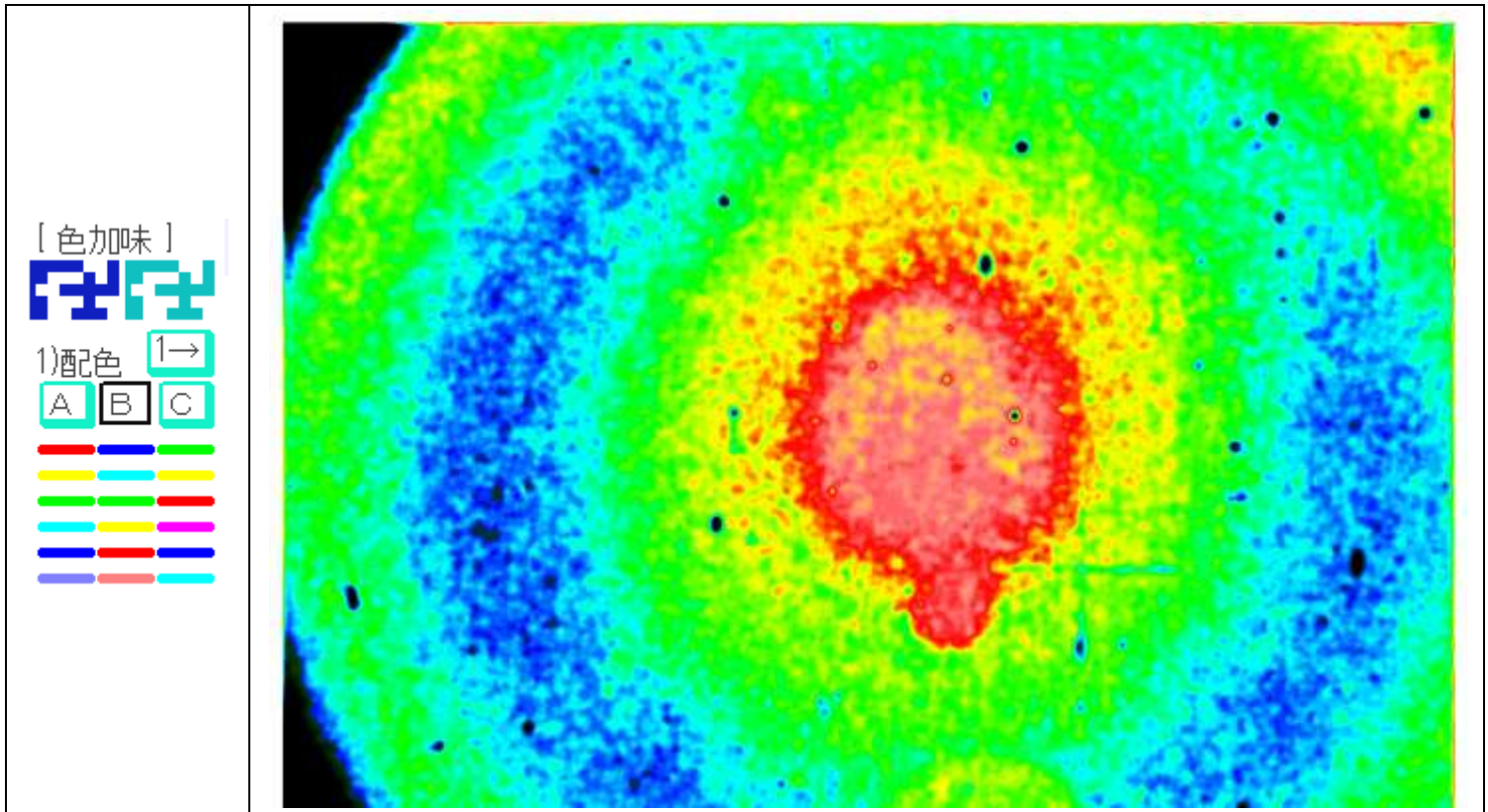


図 16 AS12-46-6805 の光球→ゴブリンアイ処理→色加味解析

小核として分離していたはずのものが、大核にくっついていきます。

AS12-47-6972



図 17 AS-47-6972



図 18 AS-47-6972 の光球

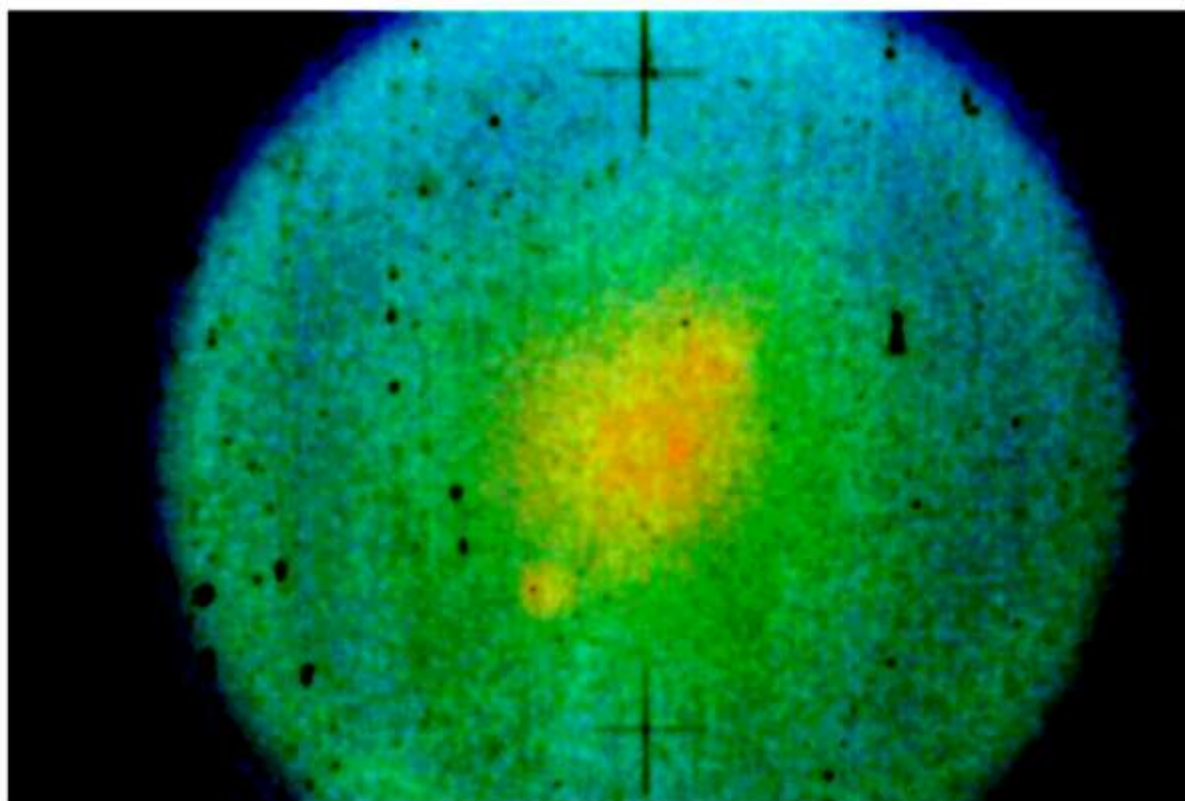


図 19 AS-47-6972 の光球→ゴブリンアイ処理

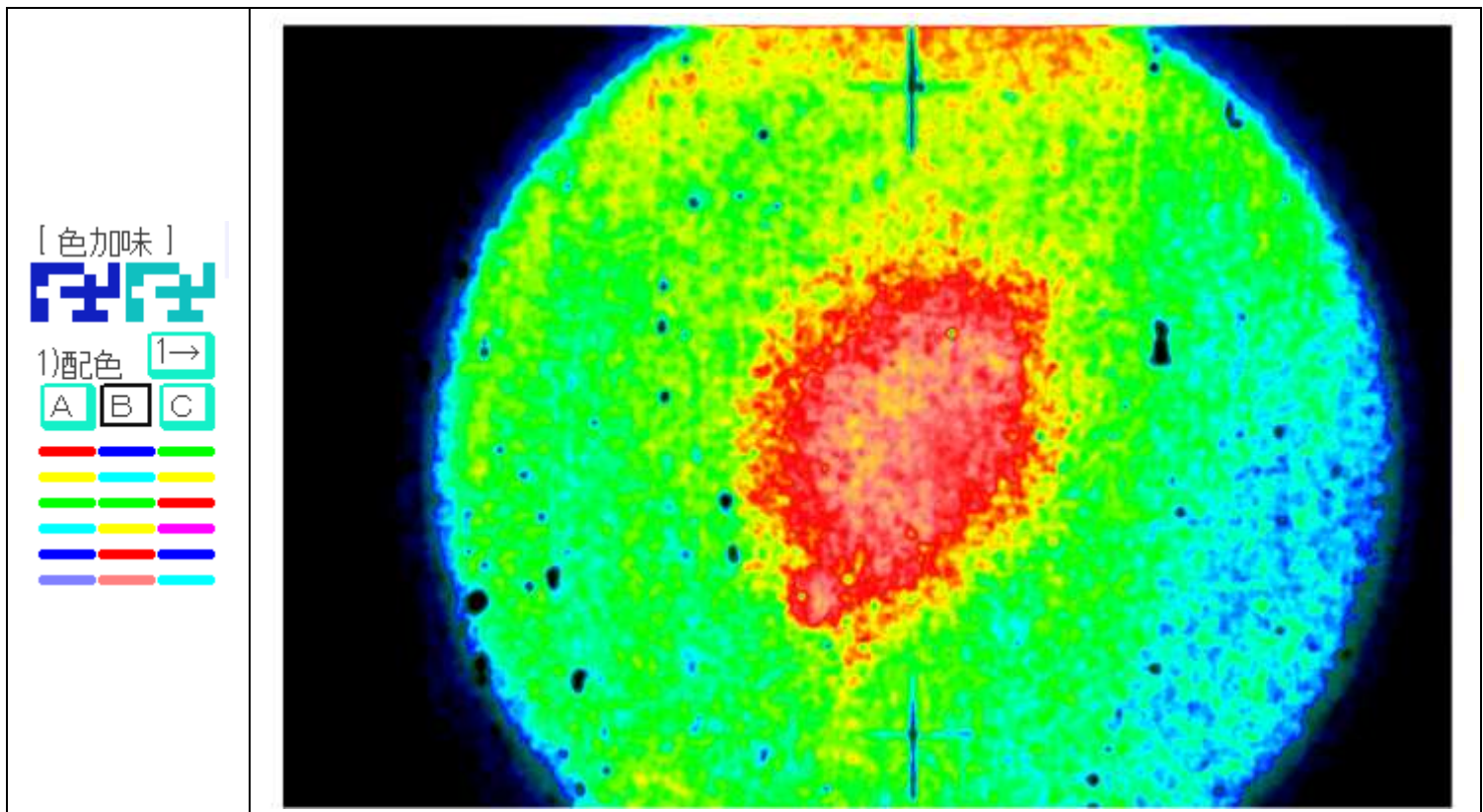


図 20 AS-47-6972 の光球→ゴブリンアイ処理→色加味解析

これも、小核が大核にくっついているかのようなパターンです。
白身にあたる領域が、あまり暗いものではなくなっています。

感想と考察

光球の構造は、透明な白熱電球というより、ニワトリの卵のほうに似ていました。中央に光源としての、黄身や核のような、中心光体らしきものがあります。これは、まるでゾウリムシの大核と小核のように、大小に分りしていましたが、やがて、ひとつに合わさってきました。大核に相当するものは、途中で、核の分裂のようなパターンとなっていました。やがて、中央でまとまってきました。

その周囲には、白身に相当する、やや暗い領域があります。

外の世界との境界となる殻のようなところの近くは、比較的明るい状態となっています。そして、殻のような境界の形は、完全な円もしくは球になっているようです。

このような、生物的とも幾何的とも言えそうなものが、顕微鏡で見るサイズではなく、宇宙飛行士や着陸船のサイズで存在しており、しかも、それはつるされたものでも、地表に足をもつものではなく、月面の上にふわふわと浮いているように撮影されています。これはかなり奇妙な光景だと言えます。

宇宙飛行士の、人間の目で見れば、とにかく丸くて光っていて、ふわふわと浮いていて、近くをうろうろしているわけですから、なんとも薄気味悪いものではなかった

でしょうか。しかし、何らかの攻撃を受けたようには記録されていません。強い光で照らされているものの、それに当たって何かが壊れたりするというものでもないようです。

マガジン Y やマガジン V で何度も撮影されているように、すぐ近くに現れては、何処かに行ったか消えて、また現れて、といったことが起こったのでしょうか。

宇宙飛行士たちは、これを何だと判断したのでしょうか。UFO でしょうか、それとも「神」でしょうか。あるいは、このような形態の「生命体」なののでしょうか。自然現象として理解するには、あまりに分からないことが多すぎます。

(Written by KLOTSUKI Kinohito, Sep. 9, 2014)